

氏名	かね しげ つとむ 兼 重 努
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第172号
学位授与の日付	平成14年11月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	西南中国, トン族の民族文化に関する動態的研究 ——鼓楼・風雨橋を中心に——

論文調査委員 (主査) 教授 金坂清則 教授 福井勝義 教授 山田 誠

論文内容の要旨

中華人民共和国は人口の9割以上を占める漢民族に加えて55の非漢民族から構成される多民族国家である。本論文は、漢民族が圧倒的多数を占める中国というマクロな枠組みを背景として人々が少数民族、民族文化に対してそそぐまなざしと、その中で生じてくる、ミクロな地域社会に住む少数民族自身の民族文化に対する意識や主張について論じたものである。具体的な考察対象としてとりあげたのは、中国西南部に居住するトン族という民族がもつ鼓楼と風雨橋という公共建築物である。鼓楼とは塔状の集会所、風雨橋とは屋根つき橋であり、現在トン族という民族を象徴するものとして位置づけられている。本論文は、合計3年以上に及ぶ現地調査によって得られた一次資料に主として基づいている。

まず、序論では、本論文の目的と課題、そして本論文の意義を、先行研究の批判的検討もふまえて提示した。その意義とは、①中国における少数民族およびその民族文化の表象の研究と②少数民族の自己意識と民族によって日常生活の中で「生きられる文化」の研究の両者を、トン族の鼓楼と風雨橋を通して統合的かつ動的に論じることである。さらに本論文を完成させるために不可欠であったフィールドワークの方法について説明した。

本論は三部構成をとり、7つの章から構成される。

第一部「現代中国社会における鼓楼・風雨橋に対するまなざしの創成」では、まずトン族と鼓楼・風雨橋の概容を説明した。続いて、トン族の鼓楼と風雨橋が中国において広く紹介されていく過程を、国家の少数民族政策や貴州省の戦略などを絡めて考察した。この結果、鼓楼・風雨橋に対するまなざしが中国社会においていかに創成されていき、鼓楼と風雨橋を文化財・観光資源およびトン族という民族の象徴とする言説がいかに普及していったのか、というプロセスとメカニズムを明らかにした(第1章)。

第二部「地域の文脈における鼓楼・風雨橋」は、4つの章から構成される。まず第2章では対象地域の村落社会の特質を住民の多様性や自己意識にも留意しながら明らかにした。次に第3章では、鼓楼・風雨橋が村落社会においていかに利用され、いかなる役割を果たしてきたのか、いわば鼓楼と風雨橋の実用的側面を、民国期から現在にかけての変遷も含めて明らかにした。これをふまえて、第4章では、鼓楼・風雨橋と風水思想の関係について、第5章では村落共同体に属している住民の総体を意味する *wagx* (ワ) という概念と鼓楼の関係について考察した。この結果、先行研究において、地域住民が鼓楼・風雨橋を自分たちにより影響を与えてくれるものとしてのみ意味づけているとすることの問題点を明らかにし、批判した。第4章では、鼓楼と風雨橋がともに風水の考え方で意味づけられていることと、それらに対する意味づけが、建設場所の風水的意味づけと不可分に結びついていることを明らかにした。さらに、先行研究が依拠する「気の風水」という見方だけでは不十分であり、「みたての風水」という意味づけが並存しており、風雨橋を集落にとって危険なものとして地域住民がみなす場合もあることを明らかにした。第5章では、公共建築物が村落共同体に属している住民の総体である *wagx* を象徴するものであると同時に、*wagx* の力も併せ持つとされていると地域住民がとらえていることを明らかにした。この力によって、公共建築物は住民にとって危険なものともみなされる場合もあるのである。鼓楼が公共建築物のなかで最も *wagx* を象徴

していると地域住民がとらえていることも、第5章で明らかになったことの一つである。

以上によって、村落社会における、地域住民の、鼓楼と風雨橋に対する地域の文脈に即した内在的な意味づけの多様性が明らかになった。

これをふまえて、第三部「鼓楼・風雨橋をめぐる地域住民の動向」では、鼓楼と風雨橋の建設・修理にあたって上級の政府や役所に提出する認可・資金援助申請書類および、建設・修理の完成後にたてられる碑文の内容を分析することによって、鼓楼と風雨橋に関する地域住民による自文化表象の問題について検討した。第6章は鼓楼、第7章は風雨橋に関する考察である。その結果、外からのまなざしと地元の知識人の間にみられる意識のずれや、外からの言説が村落社会内部へ流入する過程が明らかになるとともに、鼓楼と風雨橋に関する外からのまなざしを意識した地元の知識人による戦略的な対応も明らかになった。また風雨橋と鼓楼とでは、観光資源、民族の象徴への言及の度合いにおいて自文化表象に違いが存在することも初めて指摘した。

以上をふまえて結論では、中国の村落社会に住む少数民族の人々が外部からの表象に対してどのように対応しているのか、という点に関する従来の研究に大きな問題点があることを統括的に論じた。その問題点とは、先行研究が地域住民による自文化の意味づけに関する詳細な分析を行わずに、研究者の予定調和的な枠組みの中だけで民族文化を論じようとしていたことである。これに対して本論文は、地域住民による自文化の意味づけを、地域的な文脈から理解することの重要性を強調した。そして、最後に今後の研究課題と展望を述べた。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、西南中国の少数民族であるトン族の鼓楼と風雨橋に着目し、その建築物としての多様な意味を、中国における少数民族の自己意識と民族文化を動的に考察するという大きな目的にそって明らかにした意欲的かつ独創的な研究である。

300ページを越す本論文は、合計3年以上に及ぶ住み込み調査の成果に基づくものである。序論および第一部「現代中国における鼓楼・風雨橋に対するまなざしの創成」、第二部「地域の文脈における鼓楼・風雨橋」、第三部「鼓楼・風雨橋をめぐる地域住民の動向」と結論より構成される。自ら測量を行って作成した精緻な地図を含む21点の図や36点の表、50点の写真、18点の文書資料は、いずれもオリジナリティに富み、それ自体が一次資料として高い学術的価値をもつ。

第一部では、トン族の鼓楼と風雨橋に対するまなざしが中国社会において創成されていく過程について具体的に明らかにした。これをふまえて第二部では、まず調査地の人々が生活する場である村落社会の概要と住民の多様性や自文化に対する意識について記述した。次いで、村落社会における鼓楼と風雨橋の実用的側面と地域住民が鼓楼と風雨橋に対してもつ意味づけを考察した。その結果、鼓楼・風雨橋と風水思想の関係や、村落共同体に属している住民の総体(wagx=ワ)を象徴するものとしての鼓楼について、多くの新しい知見が得られた。第三部では、鼓楼と風雨橋に関する地域住民の自文化表象という問題を地域住民間の対立や地元の知識人の行動、役所との関わりなどに焦点を据えることによって論じ、地域住民による自文化表象の多様性が明らかになった。

本論文は以下の5つの点で高く評価される。第一点は、本論文が長期の集約的調査が事実上不可能とされてきた中国において、申請者のさまざまな能力を活かして住み込み調査を成功裡に成し遂げたとえでまとめられた論文であるということである。第二点は、そのような調査の中で、従来ほとんど知られていなかったトン語を独力でマスターし、これを駆使して調査を行ったことである。このことにより、トン族に独特なものの見方に肉薄することに成功している。このような現地語を用いた調査は中国の少数民族研究ではきわめて稀なことであり、特筆に値する。第三点は、現地調査の一方で、日本では入手が困難な中国語の文献資料の収集と分析の成果も生かし、かつ対象地域の自然的・社会的・文化的環境や景観にも広く関心を払って考察した結果、中国を対象とした民族誌的モノグラフとしてすぐれた論文に仕上がっている点である。その資料的価値にはきわめて高いものがある。

しかし、本論文は単にモノグラフとしての価値によってのみ評価されるべきものではない。本論文は、国家と民族の間の関係性に関する研究と、民族によって「生きられる文化」の中身に関する研究の乖離を批判し、両者の統合をはかっている。記述と分析は、既往の研究についての鋭い批判的検討の成果が生かされる形で展開されている。これによって本論文は、ト

ン族研究のみならず中国の少数民族研究全体からみても、理論的にも従来の水準を超えており、新たな展望を開く研究として高く評価できる。つまり、フィールドワークの成果と文献研究に基づく理論面の深さが統合されており、この点で、地域研究の一つのモデルが実現されているのである。これが本論文が評価される第四の点である。

第五点は、本論文の貢献が、単に中国の少数民族研究の枠内に留まるものではなく、いくつもの分野に及ぶことである。まず、地域的文脈を積極的に取り入れることによる民族文化の動態的把握は、静態的な研究にとどまりがちな文化地理学研究に対しても、益するところが多い。また、鼓楼・風雨橋のもつ意味の深さと多様性に関する指摘は、建築学などの隣接分野の研究にも刺激を与えられられる。さらに近年さかんになってきている風水研究に対しては、「みたての風水」に注目することの重要性についての指摘が大きな意味を有すると考えられる。

今後は、申請者が作成した大縮尺地図や収集した村人に関するデーターをより積極的に活用し、集落を構成する基本単位である世帯レベルでの分析を深めることによって、よりいっそうの研究の進展が期待される。

以上のように、本学位申請論文は、鼓楼と風雨橋という公共建築物に対する外在的な表象に着目しつつ、地域住民のそれらに対する多様で内在的な意味づけを、村落社会に深く入り込むことによって明らかにした。そのうえで、地域住民による自文化表象を分析することにより、中国国家というマクロな枠組みとミクロな地域社会との関連を動態的に描くことに成功している。従って、人間・環境学研究科人間・環境学専攻人間社会論講座（比較地域構造論）にふさわしい研究と評価される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年6月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。